

奴隷制に打ち勝つ屋根裏の女詐欺師

― ストー『アンクル・トムの小屋』

山 口 ヨ シ 子

ストーのコンフィデンス・ウーマン

ハリエット・ピーチャー・ストー（一八二一～九六）⁽¹⁾は、『アンクル・トムの小屋』（一八五二）において、奴隷制に打ち勝つ女詐欺師（コンフィデンス・ウーマン）を描いている。キャシーと呼ばれる混血の「黒人」奴隷は、捕らわれていた農園から詐欺のテクニクを用いて脱出をはかり、白人男性の「動産（chattel）」として生きてきた人生に終止符を打つ。白人の父に奴隷として売り払われ、行方不明になっていた二人の子どもたちとも、長い月日を経て再会を果し、自分自身の人生を手に入れる。

キャシーの詐欺（コンフィデンス・ゲーム）は、女性の力による社会変革の可能性を信じていたストーの意図を集約する。キャシーは、物語に登場する時点で「三十五歳から四十歳くらい」であるが、その昔、奴隷の苦しみを味わわせたくないとの思いから、産まれたばかりの第三子を殺した。「死にまさるものは与えることができない」

と確信して乳児を殺め、その行為を後悔できないほど過酷な奴隷人生を歩んできた。だが、自分同様の運命にある奴隷の少女エメリンに出会って母親の情愛を取りもどし、彼女を助けるべく詐欺行為を働く。キャシーは作品中もっとも暴力的な奴隷で、無抵抗の姿勢を貫く「十九世紀のヒロインのような」主人公「アンクル・トム」(アモンズ 一六二)の対極にいる女性である。ストーリーは、この女奴隷の詐欺行為をとおして、女の力で奴隷制の「悪」に對抗できる可能性を象徴的に描いている。

キャシーの詐欺は「屋根裏の狂女」(ギルバート 五三四―三五)の反撃である。彼女は農園主サイモン・レグリーの性欲を満たす奴隷として捕らわれていた屋敷で、屋根裏の幽霊になりすまし、彼に罠をしかける。彼の悪事の犠牲になり、不遇な死をとげた女奴隷の怨念の潜む屋敷で、その怨念をも利用して、彼を恐怖に陥れる。生前「神を信じぬ冷酷で無節操な男」になつた息子に心を傷めていたレグリーの母親も、霊となつてキャシーに荷担する。

奴隷の少女を「主人」の性的虐待から救い、自らを奴隷制のくびきから解放するためのキャシーの詐欺には、商業主義に徹する男の陰で不遇な人生を強いられ死んでいった女たちの力が結集される。奴隷制に人生を狂わされたキャシーが、「狂気と絶望」の果てに冷酷野卑な農園主を出し抜く「ゲーム」は、男性が金儲けの手段として生みだした奴隷制に、女性がその人種や立場の違いをこえて結束し挑むという図式を示している。男に支配される女の怒りを同様に狂気で示す『ジェイン・エア』(一八四七)のパーサ・メイソンは、閉じ込められた屋根裏からひとり死を賭して脱出する。キャシーはさまざまな女性の援助を得て、生きて自由を勝ちとっている。

女の力による奴隷制への挑戦は、ストーリーが『アンクル・トム』を書くことで目指したこともある。「奴隷制が

いかに酷いものかを全国民に痛感させること」は、ストーリーが『アンクル・トム』を書いた目的の一つであった（モアズ 五）。百万部以上売りあげたはじめてのアメリカ小説となったことで（トムキンス 二四、モット 二四二）、その目的はじゅうぶんに達成されたといえる。だが、作品がとくに女性読者に訴えるように書かれていることは、作者のもっとも強い関心が、奴隷制を容認する社会にあつて女の立場で何ができるか、にあつたことを示す。

作品は最大の敵を奴隷制そのものとし、その不条理さを訴えるために、家族の離散や奴隷女性の苦難などをくり返し描く。ジョルジュ・サンドが、二十世紀後半のフェミニスト批評家たちに先がけて、『アンクル・トム』を「本質的には家庭的で、家族の物語」（四六〇）と定義したように、作品はたしかに家庭小説の特徴をそなえている。十九世紀のアメリカで白人中産階級女性のあいだで爆発的人気を博していた、女性作家による、女性読者のための女性についての物語である。ストーリーは、自分の読者層が中産階級女性であることを認識し（パパシュヴィリ 七一—七三）、家事の詳細や家庭内のもめ事、子どもの教育、信仰の問題など、女性の日常生活を中心に描く家庭小説の枠組みを使って奴隷制を糾弾する。当時の白人中産階級女性が好んで読んだ、信仰や家庭の重要性を強調する家庭小説のパターンに従いながら、信仰にもとづく家庭の調和を崩壊させる元凶として奴隷制を描いている。

黒人男性作家ジェイムズ・ボールドウィンは『アンクル・トム』の「抗議小説」としての「欠陥」を指摘し、奴隷制が不正で、酷いこと以上のことは書かれていないと批判した（四九六）。一九五〇年代から六〇年代にかけての公民権運動の高まりのなかで、「アンクル・トム」という呼称は、「白人に屈従する黒人」という意味までもつよつになった。ストーリーが黒人奴隷の実態を知らないという批判や、黒人に対する誤ったイメージを植えたとい

う批判も根強い（ファーマス 五）。

一九七〇年代以降、フェミニスト批評家たちが女性の視点から『アンクル・トム』を分析する傾向が強くなったが、その契機となつたのはジェイン・トムキンスの読みである。彼女は作品を生みだした時代の「社会秩序を再定義する試み」(x)としての読みを示し、『アンクル・トム』を「女性の視点から文化を再構築する記念碑的な努力の表れ」(二二四)と評価した。人種問題の書として読むとき、『アンクル・トム』は、アフリカ黒人がアングロ・サクソンの文化に「屈従」する姿を示しているといえるかもしれない。だが、白人中産階級女性向けの家庭小説として読むとき、男性支配社会における女性の生き方の模範を示すことになる。

ストーリーがとくに白人女性読者を意識して作品を書いたことは、主人公トムをはじめとする登場人物の多くが、女性読者にとって、同化しやすい、または共感しやすい性格を示すことに表れている（パバシュヴィリ 七二―七三）。『アンクル・トム』は、貧乏教師の妻であり、七人の子どもの母であつたストーリーが、多忙な家庭生活のなかから、同様の状況下にある女性たちに向けて発信した社会変革への挑戦メッセージであつたといえる。

ストーリーは、『アンクル・トム』の内容を説明する編集者への手紙で、「家父長制の光と影を浮き彫りにする」(ヘドリック 2 六六)と述べている。「家父長制」という語が「奴隷制」と同義で用いられ、とくに南部では好意的な意味をもっていたことからすれば（アモンズ 一七四）、ストーリーがこの手紙で意味するのは、経済的基盤をもつ白人男性による黒人支配としての家父長制であり、とくに男性による女性支配ではなかつた可能性が高い。実際作品においても、前者の意味で用いられ、後者の意味で使用されているのは「髭剃り」という反家父長制的行為に勤しむ」という箇所のみである（一七四）。だが、作品が示すのは、男性中心社会で女性が社会変革の力を発揮する

可能性である。ストーリーは、奴隷制という「家父長制」を是正するための提案として、男性の女性支配を意味する「家父長制」の権力構造を逆転する発想を示している。

女性が男性支配を覆すという発想は、『アンクル・トム』が同時代に書かれた他の家庭小説と異なる点でもある。たとえば、その前年に出版された『広い、広い世界』（一八五一）は、孤児であるヒロインの流浪によって家庭の重要さを強調する家庭小説であるが、女性の力は男性中心社会に都合よく取り込まれている。日曜学校の推薦図書に指定されてベストセラーになった事実が示すように、ヒロインの怒りや疑いが宗教の名のもとに解決され、女性が男性の僕となることが神の意志として正当化されている。『アンクル・トム』にみられるような、敬虔な女性による社会変革への挑戦メッセージは皆無であり、キャシーのコンフィデンス・ゲームのような、過激な手段による男性権力への挑戦例は見当たらない。

『アンクル・トム』は、たしかに、奴隷制を合法とする社会でとくに「女性の義務は何か」を示す書として読むことができる。だが、ストーリーはイデオロギーを表明するただけにこの作品を書いたのではない。多忙な主婦であった彼女が「必死の覚悟」（モアズ 五）をして書いたのは、生活のためでもあった。大所帯の家計は、結婚当初から、ストーリーが得る原稿料なしには成り立たなかったという（ケリー 一六九—七〇）。エレン・モアズは、ストーリーの夫が「妻やたくさんの赤ん坊のためにもつと稼いだなら、『アンクル・トム』は生まれなかったであろう」（モアズ 一二九）と述べている。十九世紀の女性作家の多くがそうであったように、ストーリーが生活の必要に迫られて書いたことは、キャシーのコンフィデンス・ゲームにも多大な影響を及ぼしている。攻撃的な女性を描きながら、物語を「購入する」読者の共感を得る工夫を入念に施しているからだ。

ストーが広く読まれることを意識していたことは、『アンクル・トム』の生成過程にも顕著に表れている。キャシーのコンフィデンス・ゲームの真の意義は、この生成過程を無視して突きとめることはできない。『アンクル・トム』は、本の形で出版される前に、『ワシントンの週刊新聞』『ナショナル・イラー』に掲載された。奴隷制廃止を標榜するこの週刊新聞の編集者にストーリーは自ら手紙を書いて売り込み、連載の契約に漕ぎつけている。『アンクル・トム』は、奴隷問題に関する記事とならんで、さまざまな娯楽読物を掲載した（シルウェスター 六一七）週刊新聞の読者の反応によって成長した物語である。連載途中で単行本として出版することが決まり、改訂によってさらなる変化を遂げている。作品は、現在の読者が手にする形になるまで、一八五〇年代の文字市場の影響を多分に受けており、ストーリーはそのなかで、女性が奴隷制の悪に挑戦できるといふメッセージを盛込んだことになる。

本稿では、『アンクル・トム』を女の力による社会変革への挑戦書ととらえ、作品中もつとめ攻撃的なキャシーが挑むコンフィデンス・ゲームの意味を分析したい。作品の生成過程が物語にどのような影響を与えているかを考慮しながら、ストーがキャシーのコンフィデンス・ゲームに託した意味を考えたい。

男の領域と女の領域

キャシーのコンフィデンス・ゲームは、作品の終結部でくり広げられることで重要な意味をもつ。作者がそれまでにくり返し主張してきた内容が、そのゲームに集約されるためである。ゲームは、奴隷制を生みだすに至った利潤追求を最優先する男の世界の価値観と、キリスト教の愛にもとづく女の世界の価値観との相克を示す。ストーリーは

自らの主張をキャシーの詐欺によって要約し、作品の結論にしたといえるが、男女の世界の対立を明確に示すゲームは、それ以前の章で表れた対立関係を総括するものである。

『アンクル・トム』には、アメリカが産業資本主義に変換する過程で形成された、性差によって活動領域を限定する価値観が明確に示されている。十九世紀のアメリカでは、産業資本主義の発達によって中産階級が生まれると、その階級に属する女性の「適切な領域」を家庭とする価値観が主流となった。男性が家の外で熾烈な生産活動を強いられるなか、女性は家の中にあつて、「信心深く、性的に純血、男性に従順で、家庭的である」などの「美德」を発揮し、自由競争に疲れた男性を癒し、世俗的実利の追求に汚れた男性を矯正するというものである（ウエルター 一五二）。とりわけ、信心深さが重要な美德とされ、教会活動は女性を家庭という「適切な領域」に押し留めておくもつとも有効な手段だったといわれる（一五三）。牧師たちは、「服従なくして世界は終る」と主張し、家庭や社会の秩序を保つ名目で、とくに女性の男性への服従を説いたという（コット 一五八―五九）。

性別によって役割分担を明確化する価値観は、中産階級女性を上流階級の「レディ」のようにまつりあげながら、「私的」領域に閉じ込める方便となった。結果として、「公的」領域で経済活動に従事する男性とのあいだに階層を生みだし、女性を「第二の性」にする家父長制の礎が強固になったのである。『アンクル・トム』が描くのは、家父長制社会の下位におかれた女性たちからの社会変革の可能性である。混血の黒人奴隷キャシーが、黒人・白人の女性と連帯してくり広げるコンフィデンス・ゲームは、このような可能性を象徴的に示したものである。奴隷であり、女性であるキャシーが白人農園主を農にかけるというゲーム設定は、権力の逆転という意味では二重の重みをもつ。

『アンクル・トム』は、作品冒頭から奴隷制が男の世界のビジネスであることを明確にする。ストーリーは二人の白人男性が商談する姿を描き、取引する「商品」が人間であることを示すことで、奴隷制が彼らの金儲けの手段に過ぎないことを明らかにする。奴隷商人が人間を売買する商売で「人を押しのけて世の中を這いあがる」とする一方で、農園主は「大々的な投機」に失敗して奴隷を手放す状況を設定し、奴隷制が十九世紀アメリカの産業資本主義経済に当然のごとく組み入れられている様子を描く。男性たちの会話に、「商品損傷」「市場」「商談成立」などのビジネス用語が飛び交い、奴隷の運命がありふれた商談の場で決定される残酷さが風刺的に示される。「あの娘で一財産作る」「市場で売るために可愛い少年を買い占める」などという奴隷商人の発言は、奴隷制の存在理由が金儲け以外にはないことを強調する。キャッシュが罫をかけるレグリーは、この奴隷商人に連なる男であり、金儲け第一主義に徹して農園を所有するまでになることで、ストーリーが描く男の世界の価値観では成功者である。

男たちが金儲けのために奴隷制を合法化している事実を明らかにする一方、ストーリーは奴隷制が女の領域に不条理に侵入する様子を描く。ケンタッキーの農園主シエルビーの妻エミリーは、「高い道德的宗教的感性と信念」をもち、「家の召使いの慰安や教育、改善に愛情こめてつくす」という点で、十九世紀の白人中産階級女性に求められた理想の姿を示す。農園経営に勤しむ夫は自分にはそなわっていない「宗教心や慈悲心」という「美德」を妻が二人分もっていると思い、自分も天国に行けると信じている。夫妻の関係は、当時の女性雑誌や新聞、宗教的パンフレット、牧師の説教などに頻繁に表れた夫婦の「あるべき姿」を反映する（ウェルター 一五一）。

だがエミリーは、夫の経済的危機によって、奴隷に愛情を注ぐことで奴隷制の悪に「メッキをかけていた」自分の「愚かさ」を思い知る。キリスト教徒の「義務」として、奴隷たちに「家族、親子、夫婦の義務」を教えてきた

にもかかわらず、彼らが夫に売られて家族離散の憂き目にあつのを阻止することができず、自らの信念の破綻をみる。「酷いビジネスの共犯者にならない」という願いも空しく、一家の危機を救う手だてをみいだせない彼女の姿は、家父長制社会が求める理想の女性の無力さを露呈する。

シエルビー夫妻のあいだに存在する力関係は、彼らと奴隷とのあいだの力関係と相似する。ストーリーはシエルビー農園の場所を「奴隷制のもつとも穏やかな形態がみられる」ケンタッキーと特定し、そこでは「寛大な」奴隷所有者と「忠実な」奴隷との関係を「家父長制の詩情あふれる伝説」にまつりあげる傾向があると指摘する。奴隷制支持者が主張するように、「主人」と「奴隷」とのあいだに深い愛情関係が存在することを認めながらも、生身の人間を「主人」の所有物とみなす法律のもとでは、その愛情関係が永続しがたいことを明らかにする。夫の経済的危機で専業主婦の理想が崩れるエミリーの場合同様、「主人」のビジネスの失敗で運命の大変換を余儀なくされる奴隷たちの姿は、人間に階級を作るシステムの欠陥を明らかにする。「このうえなく制御された運営」で、「美しいものや好ましいもの」が生まれても、システムが人権に配慮し、一人ひとりの精神的・経済的独立を基本として成立しているものでなければ、それらが一瞬に「希望のない悲惨な苦役」に変換する可能性を示している。

シエルビーの経済力に依存し、彼を「主人」とみなすことを「慣習として」期待されている妻は、彼の経済的危機で自らの存在理由の破綻をきたすが、表面的には変わらぬ生活が続けることができる。同様の経済依存と主従関係を、「法律で規定されている」奴隷たちは「主人」が借金をすれば、その身をもって返済しなければならず、家族離散を余儀なくされる。ストーリーは、シエルビーの経営不振によつて悲惨な運命に直面する二人の奴隷に焦点を当てることで、男の金儲け手段としての奴隷制が女の世界を蝕むさまをより具体的に示す。二人の奴隷とは、奴隷商

人に売られて深南部への旅を続けるトムと、息子の売買が成立したことを聞きつけて、カナダへの逃亡を企てるイライザである。

トムはアフリカ黒人の特徴を顕著に示す男性であるが、当時の白人中産階級女性に課せられた敬虔、従順などの「美德」をもって奴隷制に対処する（パバシユヴィリ 七三）。この意味で、彼の価値観は女の世界のものであり、彼が蒙る受難は、男のビジネスが女の世界に影響を与える例とみなすことができる。黒人男性が白人女性の文化を実践するというトムの性格設定は、白人女性読者の自己投影を容易にしたかもしれないが、一九五〇年から六〇年代の公民権運動の時代には『アンクル・トム』と呼ばれるくらいなら『ニガー』と呼ばれる方がまし」という風潮を招く大きな要因になる（ファーンズ ハ、小林憲二 五四七）。

トムは「主人」の決断に黙従して自分の家族と今生の別れをし、イライザは幼い子どもを守るために「主人」への忠誠を破って逃亡する。二人の行動は、正反対の形を示しながらも、エミリーが農園主の妻として彼らに教えた奴隷の「あるべき姿」を反映している。それはとりもなおさず、彼女自身が社会から女性の「あるべき姿」として教えられた姿でもある。「キリスト教徒の母親として」「子どもを育てようエミリーに教育されたイライザは、その子どもが売られたことを知るまでは、「ご主人さまと奥さまに従順でなければ、キリスト教徒ではいられない」と言つ。イライザは、「主人」夫妻への忠誠よりも子どもへの愛情と義務を優先するが、彼女の発言は、宗教が人間の序列化を正当化する道具として利用されたことを端的に示している。

ストーがとらえる奴隷制の女の世界への浸食は、主に性的虐待であり、母性愛の蹂躪であり、究極的には家庭の崩壊である。トムとイライザは、一方は家族との再会を果せぬまま、ニューオーリンズのレグリー農園で虐待死し、

他方はカナダで自由を勝ち得て家族の結果も強めるというように、対照的な運命をたどる。ストーリーは二人の苦難の道程を追跡するという、連載小説の延長を容易にするパターンに従いながら、彼ら同様に、または彼ら以上に、奴隷ビジネスの悲惨な犠牲者となる黒人女性のエピソードを次つぎと挿入する。子どもと別々のところに売られる辛さに耐えきれず、川に身を投げる若い母親の話や、市場に売る子どもを産むために投機師に養われていた老女の話などである。レグリー農園でトムと出会うキャシーが語る子殺しの話は、奴隷女性のエピソードの圧巻である。

奴隷女性の人生を直接「操作する」奴隷狩りの白人男性は、「もし、自分の子どものことなんか気にかけねえ品種の女が作れば、近代で最高の品種改良になると思うけどな」と言つ。この発言には、ストーリーが白人女性読者に訴えたかった奴隷制の根本が示されている。黒人女性を「人間商品」を産み増やす経済上の便宜としかみなさない奴隷制である。

奴隷ビジネスが「女の領域」におよぼす弊害は、「奴隷制を正当と考える」加害者にまで浸透する。ストーリーはトムの三番目の「主人」オーガスティン・セント・クレアの妻マリーをとおして、奴隷ビジネスがその「利益」を「消費する」女性にまでも悪影響をおよぼす様子を描く。マリーは、奴隷制を当然とみなす環境のなかにどっぷり浸かつて生きてきたために、「きわめて強烈で無意識な自己中心性」にとらわれている。「奴隷制がなければ生きていけない」と言い、奴隷たちを極限まで酷使しながら、「自己中心的なところが全黒人の欠点である」とその攻撃の手をゆるめない。「卑しい民族」ゆえに彼らを「抑えつけ」、「自分の立場をわからせなければならぬ」と主張し、娘のエウアが彼らを平等扱いすることを嘆きもする。

その偏見は、信仰によって是正されることもなく、彼女が「すばらしいお説教をした」という牧師は、「社会に

おけるすべての秩序や区別がどのように神によってもたらされたか」を示し、奴隷制の正当性を聖書によって証明する。彼女の後ろには、「アメリカでもっとも権力的な男性の団体」とストーリーが『アングル・トムの小屋の鍵』（一八五三）で書く、牧師たちがについていることになる。

奴隷たちを「自分の人生の疫病」と呼んで虐待しながら、自分が病氣だという幻想に日々をまぎらすマリーは、奴隷制の加害者であると同時に被害者でもある。奴隷制を生みだした偏見を奴隷たちとの日常で加速させ、他者を思いやることも愛することもできず、自らも不幸感を募らせているからである。「天使のような」娘を愛することも、その健康や養育に心を砕くこともできず、自己中心性からくる不満の穴でもがくマリーは、奴隷制を容認する男の価値観に依拠して生きる女の悲劇を背負っている。

黒人奴隷への不満を鬱積させて、「ここ南部では、農園主の妻たちこそ奴隷だわ」と、マリーは言う。その言葉どおり、彼女は奴隷制の罠にとらわれた奴隷である。彼女の特異な人物造型は、ストーリーの職業作家としての腕を証明するものであるが、奴隷制を支持する彼女がその悲惨な奴隷になっている点で、いつそう強烈な印象を放っている。

ストーリーは奴隷ビジネスを、女性ばかりでなく、それに携わる男性自身をも蝕むものとしてとらえている。奴隷商人や奴隷狩りの「腐敗や墮落」を詳述し、それらが利潤追求を第一義とする男の価値観の結集によって生みだされていることを明らかにする。「奴隷制によって金儲けをする農園主たち、彼らを喜ばせる聖職者たち、奴隷制によって支配しようとする政治家たち」が「自然や聖書などを自分たちに都合よく解釈して」奴隷制を容認しているとし、そのうえで、生活や野心のために奴隷ビジネスの「墮落や腐敗」に身を染める「無知で」「卑しい」男たちを

描く。奴隷制を合法としている限り、ミシシッピ河と太平洋のあいだの広大な地域が人間商品の一大市場と化し、奴隷商人も奴隷狩りも、金持ちという名の愛国貴族になる日があると警告する。奴隷女性の自殺を「自分の資産運用を妨害するもの」とみなし、会計帳簿に「損失」と記入する奴隷商人の姿を克明に描き、人身売買による利潤の恩恵を得ている点では、「紳士」と呼ばれる北部のキリスト教徒も同罪であると主張する。

ストーリーは、奴隷制を「大胆で明白な人権侵害」と認識しながら、「奴隷制によって金儲けをする農園主」に名を連ねる男性も描く。農園主の息子として奴隷制のなかで成長し、その「ペテン」を熟知する知的エリート、セント・クレアをとおして、世襲によって奴隷ビジネスにかかわる男性の苦悩を明らかにする。彼は、「人間の肉体と精神を取り扱う投機師、飼育人、奴隷商人、仲買人」を生みだす南部を、「地獄に取り憑かれた世界」と呼ぶが、その現実には「できるだけ目をつぶり、心を無感覚にして、日々を過ごす」「辛く、汚く、不快なものなんだから、奴隷にやらせることはできる」「奴隷に金を稼がせ、私が使つ」という発言が示すように、奴隷制によって受ける「快適さ」を拒絶できない自分の欺瞞に気づいてもいる。奴隷廃止論者として北部で活動する道も若き日の絶望の経験によって閉ざされ、奴隷制が奴隷にも「主人」にも弊害をもたらすと思いつながら農園主として奴隷を保有し続ける彼は、奴隷制を生みだした男の世界のささやかな良識を代表する。奴隷制の罪を深く認識することによって、彼には変革の可能性が残されているからである。

セント・クレアが「地獄に取り憑かれた世界」と呼ぶ南部で、文字どおり地獄のような農園をもち、悪魔のような運営をしているレグリーは、ストーリーが『アンクル・トム』で描く男の世界の象徴である。背が低いが筋骨たくましく、丸い弾丸のような頭に、日にさらされた堅い針金のような髪、というレグリーの風貌じたいが、象徴する世

界のグロテスクさを物語る。トム最後の「主人」である彼は、人間の肉体だけでなく魂をも金と権力で所有しようとし、魂の自由を主張し続けるトムを殴り殺す。ストーは、レグリーのような農園主を生みだし、その存在を合法とする男の世界の価値観に、その被害者キャシーの「激しい誇りと反抗心」を対抗させることになる。

キャシーは勝利を得るが、その勝因は彼女自身の心の改革であり、女の世界の結束にある。男の世界で生みだされた奴隷制が、女の世界ではびこる状況、男性自身をも蝕む状況をくり返し描いてきたストーは、キャシーの詐欺を成功させることで、作品の結論を示している。その結論とは、キリスト教の愛を基本とする女の世界の連帯によって社会に変革をもたらすことができる、というものである。十九世紀のアメリカで、女性や黒人を白人男性の下位に位置づけるために利用された宗教は、ストーの世界では、女性が人種をこえて結束し、主体性をもつ要となる。『広い、広い世界』などでは、男性権力への黙従を強いられる怒りや矛盾を説明する道具にすぎない女性の信仰心が、『アンクル・トム』では、男性権力に対抗し、打ち勝つための有効な手段にもなる。

女の力による社会変革

キャシーは、レグリー農園を脱出するための詐欺を働くにあたって、心の改革を行っている。その改革によって、キャシーは復讐を果すことから解放され、愛のために詐欺を実行する。「自分が目撃し、その身で受けてきた不正や残忍行為すべてを自らの手で圧制者に復讐としてお返しする」と誓っていた彼女であるが、レグリーへの詐欺は復讐のためではなく、彼の情婦として新しく買われた少女エメリンのためである。キャシーの詐欺が成功する最後

の鍵は、彼女がエメリンへの愛情に目覚め、その愛をつらぬくことにある。エメリンと母と娘のような愛情関係を結ぶことで、キャシーが自由を得て生きる希望をもつことになるからだ。レグリーに復讐して「自爆」する、という想念から解放されるのである。

キャシーの心の改革は、ストーが主張する女の力による社会変革への第一段階を示す。「すべてを乗り越え、いつでも愛し祈ることができれば、闘いは終り、勝利は得られる」と説くトムは援助によつて、キャシーは自らを変える。敵を憎み復讐することの非を諭し、「邪悪なものからよいものは生まれない」と言つトムは、キャシーを愛にもとづく女の世界に引き入れ、「正しく感じる」ように仕向けたことになる。トムがキャシーに説く「正しく感じる」重要さは、ストーが『アンクル・トム』をつづじて女性読者に訴えたことでもある。キャシーはトムの忠告を受け入れることで、実現可能な詐欺の策略を啓示のように思いつくが、そこには、「正しく感じる」ことによつて社会変革への第一歩を踏みだすことができる、というストーの信念が表れている。

ストーは、一八五四年二月二十三日付けの週刊宗教新聞『インディペンダント』に「自由州の女性たちへの訴え」と題した一文を寄せている。奴隷制の地域拡大を許す「カンサス・ネブラスカ法案」が上院で採決される前夜のことである。その記事においてストーは、「アメリカ女性の第一の義務は、個々の女性が（奴隷制拡大の）問題を自分の力で完全に理解し、母、妻、姉妹として、または社会の一員として、自分の影響力を正しい側に行使すべきだと感じるのだ」と訴えている。この主張を裏づけるのは、国家の危機や一大事に際して、女性が強い影響力を発揮できる、というストーの確信である。

この確信は『アンクル・トム』をつらぬくものでもある。妻に奴隷売買の卑劣さをなじられ、良心の呵責を感じ

るシエルビーは、女性と牧師が前面に出て男性たちに道徳感を目覚めさせれば改革への道が開けると主張する。シエルビーの言う女性とは、妻のような、「敬虔さ」を中心とする「美德」の保持者であり、牧師とは、奴隷ビジネスに荷担するために聖書を曲解することのない「ほんもの」の聖職者である。シエルビーの主張は、ストーが考えた社会変革への具体的な方法を指し示す。

シエルビーの主張は、まず、妻のエミリーによつて具体化される。彼女は男性が作りあげた主婦の理想が破綻したのち、夫に従属する無力な妻の座から脱出するための努力を始める。夫の仕事内容を知りたいと申しでて、音楽の弟子をとつて自分で収入を得たいと発言するようになる。「ビジネスのことは（女には）わからない」（女が仕事をして）自分を貶めることはない」というのが、このときの夫の返事である。だが、「聡明で活動的で実際的な精神や、性格の強さにおいてすべて夫より優れていた」と書くストーは、エミリーの潜在能力を強調し、「彼女に経営の能力があることを認めることは夫が考えるほど馬鹿げたことではない」と続ける。じじつ、エミリーは、夫の死後、もち前の活動性を発揮して、農園の立て直しをはかる。夫がエミリーを唯一の遺産管理人に指定したことは、彼女の常日頃の言動が夫を動かした結果とみなすことができる。夫と異なる意見を明言する態度は、変革への原動力である。

子育ても実を結び、息子は長じて母親の無念を果す。その死を食いとめることはできなかったものの、トムを迎えにいくという約束を守り、二度と奴隷はもたない、という決心のもとに農園のすべての奴隷を解放する。息子の行為は、奴隷制の罪を深く感知し、「神に対して責任を負つ」と言つ母親によつて、改革の芽が育てられた結果とみなすことができる。仕事の能力を発揮するのが夫の死後であることや、自分で奴隷を解放しないで息子に託すこ

などと、改革の芽は依然として「女の領域」を大きくこえることはない。だが、その限られた枠のなかで、エミリーが自ら変化し、他を変化させたことはじつである。

母親の力によって社会の不正に挑戦できるというストーリーの主張は、セント・クレアの母親の例にも示される。セント・クレアは自らの精神形成に実母の強い影響があったと迷懐する。「母は、私の魂そのものに、もっとも卑しい人間の心にも尊厳と価値があるという考えを刻印しました」という彼の発言が示すように、彼の思想の原点は、幼き日の母親の教育にある。同じ母親に育てられながら、「大衆を奴隷化することなしに高い文明はあり得ない」と断言するセント・クレアの双子の兄をとあして、ストーリーは母親の教育ですべてを変えることはできない、という現実も提示する。だが、ビジネス優先で奴隷の過酷さに目をつむる夫に絶望したというセント・クレアの母が、「自分の考えと感性で自分の子どもをしつけて」奴隷制をペテンと考える息子を育てたことは、女の力による社会変革の可能性を指し示す。⁽³⁾

ストーリーは、『アンクル・トム』の最終章で、あらゆる読者に向けて奴隷制の不法性を自分の言葉で呼びかけている。とくに母親への訴えには熱がこもり、『インディペンダント』紙に掲載した「女性たちへの訴え」と同様の主張を展開する。「(白人) 同様の愛情をもちながら、胸に抱く子どもを守り、導き、教育する法的な権利をもたない(黒人の) 母親に同情を寄せて欲しい」と訴える。同じ母親の権利が剥奪されていることを「黙って見過ごして」よいのかと問いかけ、母親の力で世の中を変えることができるかと主張する。母親が奴隷制の罪深さを感じていたら、息子たちは奴隷所有者にも敵しい主人にもならず、奴隷制がはびこるのを見逃すことはない、と。

ストーリーがこのように母親の力を強調するとき、その根底にあるのは、家父長制に組み入れられた母性礼賛の価値

観と同じではないか、という疑問が起る。母親が子育てをとおして社会に与える影響力を「国王や軍隊、政治家たちの影響力よりも強大である」(メルダー 九)とまつりあげ、女性を家庭という「適切な領域」に押し込めた価値観である。男性支配社会を維持する便利な手段として、母親個人のなかに宗教的・道德的美徳を求め、国家に貢献する息子たちを育てることを、「女性の適切な義務であり、特別な名誉」(メルダー 九)とみなした価値観は、ストーリーのなかでどのような位置を占めていたのだろうか。

この疑問に対する答は、ストーリーの賛美する母親の力が「男の領域」の価値観と対立関係にあるという一点によって説明できる。エミリーにしても、セント・クレアの母親にしても、男性支配の最悪の形態としての奴隷制に異を唱え、夫がかかわる奴隷ビジネスの罪を告発する姿勢をとる。二人はともに、男性が求める女性の理想を実践する過程でその欺瞞に気づき、自らの信念をつらぬく努力のなかで、子どものなかに改革の芽を育てている。小林富久子は、エイドリアン・リッチの母性論と対照させてストーリーの母性を「経験としての母性」として定義している(四四)。家父長制を維持するための「制度としての母性」とは異なる、生み育てる者の喜びとなる母性である(四五)。エミリーやセント・クレアの母親を支えるのは、キリスト教の教義にもとづく、虐げられた人びとへの深い同情の念であり、人間の尊厳への限らない畏敬の念である。彼女たちは、ストーリーにとって、利益追求を第一義とする農園主に追従し、奴隷制擁護の説教をする牧師たちの対極にいる真正正銘のクリスチャンである。ストーリーは、『アンクル・トム』の最終章で、「女性たちへの訴え」同様に、奴隷制廃止のために一人ひとりができることは「正しく感じるよつ気をつけることだ」と訴えている。エミリーとセント・クレアの母親は、文字どおり、ストーリーのこの訴えを実践することで、社会変革の芽を育てたといえる。

ストーリーの礼賛する母親の力が、男性の権利と利益を守る家父長制の価値観と対立関係にあることは、そのような力が生物学的な母親だけの特殊能力とはみなされていないことから明らかである。ストーリーは、子どもを産むこととは無縁の人びとにも、社会変革をもたらす母なる力がそなわっていると考える。『アンクル・トム』では、エヴァのような幼い子どもや、彼女を面倒みるためにヴァーモント州からやってきた独身中年女性のオフィーリア、しいてはトムのような男性も「母親」である（アモンズ 一六三、小林富久子 四四―四六）。黒人女性を金儲けの「子を産む機械」にする視点で奴隷制の悪を伝えるストーリーは、女性を「産む性」とのみ規定して、その母性を男性支配の便利な道具に利用する価値観とは一線を画している。

エヴァは父親に対しても、他のすべての人に対しても母なる力を発揮する。「聖書とともに生き、聖書とともに死んだ」というセント・クレアの母親の再来のようにあらゆる人間に愛を注ぎ、その愛によって周囲の人びとに「正しく感じる」「よつ仕向けるためである。奴隷の苦しみに直面するたびに」「その苦しみが胸に沈み込む」と言うエヴァは、「正しく感じる」心によって他者を改革への行動に駆り立てる。父親は、奴隷ビジネスの究極の被害者ともいべき黒人少女トプシーに無償の愛を注ぐ娘を見て実母を思い出し、奴隷解放の夢を再燃させている。奴隷制に対して「正しいことをする」というエヴァへの約束を果す形で、虐げられた奴隷たちへの「義務」を果す決意をする。

オフィーリアは、人類すべての母たるエヴァ（アモンズ 一〇四）の影響を受け、自らも「母」になる。奴隷制の悪を体現する黒人少女トプシーを「善良なキリスト教徒の娘として育てる」役目を負うことで、母なる力を発揮するに至る。ストーリーが北部人の代表として造型するオフィーリアは、奴隷制に強く反対しながらも黒人たちへの偏

見を捨てきれない矛盾を抱えている。だが彼女は、「キリストのように」「愛に満ちた」エヴァから「教えを受けて」その偏見を克服し、「正しく感じる」力を養つ。投機師に商品として育てられ、「抑圧 従属 無知 苦役 悪徳の歴史から生みだされた」トプシーを、「一つの魂は世界中のお金を集めたよりも尊い」という「キリスト教の教えに則つて」育てることで、オフィーリアもまた、ストーリーの考える母なる力をそなえることになる。

トムが母なる力をそなえていることは、作品の至るところで確認できるが、彼の死に立ち会つジョージ・シエルビーとの関係にもっとも顕著に表れている。トムは、かつての「若主人」ジョージの心に社会変革へのたしかな決意を芽生えさせることで、母なる力をもつことになる。この力は、彼が男の世界の金と権力に肉体を蝕まれながらも、女の世界にその魂を委ね、キリストの愛を説くことで発揮される。

ジョージの精神形成は「宗教的なことがらをじゅうぶんに教育した」実母エミリーと、その実母の「偉大さ」を彼に説いたトムによつてなされている。トムは、少年ジョージとの別れに際して、「女性のように優しい声」で、「ほんものの紳士道」を諭すが、その根幹は「お母さんのようなキリスト教徒になること、若きキリストのように振る舞つこと」である。この忠告は、成長して彼を迎えに行くジョージの前でトム自身によつて具現され、トムは母親の価値観を次世代に伝えることで、社会変革をもたらしている。ジョージは、トムの墓で、「この国から奴隷制の呪いを追い払うためにひとりの男にできることはなんでもする」という決意し、その後この決意を実行するからである。

トムがジョージに伝える母親の価値観は、キャシーに伝える価値観でもある。キャシーは、キリストの愛を説き、実践するトムによつて、他者への愛情と祈りを取りもどす。トムは、彼女に「血を流すような罪を犯さない」方法

での脱出をつながすばかりでなく、レグリーの拷問にあいながらもその脱出の秘密を守りとおす。自己犠牲的な愛を注ぐその姿によって、彼女の「長い絶望の冬、氷のような年月」を溶解させている。自分の子どもを胸に抱けない母親の苦しみと、性の奴隷として苦しみ、「生きながら死んでいた」キャシーであつたが、トムの援助によって生きる希望をみだしている。

彼女が祈りを回復するのは、トムの愛情に満ちた最期のことによる。傷つき絶望した魂を慰め、その誤りを正し、その旅立ちをつながして祈り、自らの身が危険に瀕してもその成功を援助して見守るという、トムのキャシーに対する態度は、エミリーやセント・クレアの母親の態度に通じるものがある。シエルビーは、女性と牧師によって社会を改革できると言つたが、トムは両者の要素をあわせもっている。他者を新しく生まれ変わらせる母のような力を発揮するばかりでなく、スティックなまでに信仰をつらぬき、「若きキリストのように振る舞う」聖職者でもある。じじつ、トムはキャシーに「トム神父さま」と呼ばれている。

キャシーのコンフィデンス・ゲームの最大の特徴は、女の世界の価値観が結集されることである。「失意の人びとを団結させ、傷ついた人びとを自由にする」とに神は自らの使命をみいだす、という作者の言葉どおり、ゲームには、レグリーの価値観に反対する人や苦しめられた人が直接的・間接的に加わる。キャシーの脱出を導き援助するトムはもとより、レグリーに搾取され殺された黒人女性、レグリーを更生させようと懇願し祈り続けた美母、さらには、トムに遺した金髪の巻き毛によってレグリーに美母にまつわる妄想に迷い込ませるエヴァなどである。

キャシーはこのような人びとの後押しを受け、「すべてを金儲けに利用する」レグリーから、自分とエメリンの心身の自由を勝ちとる。奴隷制の被害者としてのアフリカ黒人、レグリーの悪事をやめさせたいと願いながら死ん

だニユーイングランドの母、人類最初の女性の名前で呼ばれる南部の子どもエヴァが、白人と黒人の混血であるキャシーの詐欺に集結するという図式は、それぞれが女の価値観を分かち合いながら異なった人種・地域などの代表となることで、女の価値観の総体とみなすことができる。その総体の後ろ楯を得て、キャシーが自分の自由を獲得するばかりでなく、同境遇にある次世代の女性を助けるために、女の力で社会変革に挑むコンフィデンス・ゲームの意味はより強くなっている。

混血奴隷の詐欺戦略とその意味

女の力が結集されるキャシーのコンフィデンス・ゲームで、とりわけ重要な働きをするのは死んだ女性たちである。ゲームは、十五歳の少女エメリンの自由な将来を保証することで女の価値観の未来へのつながりを示すが、死者たちも加わることで、女の人生が男の価値観に蝕まれた歴史を総括する意味合いをもつ。キャシーは死者たちの力を借りてレグリーを恐怖に陥れ、彼は阿鼻叫喚のなか「天罰」がくだる日を待つことになる。ストーリーは、男の価値観が生みだした究極の悪たるレグリーを死に追い込み、その価値観を象徴的な意味で終焉させている。レグリーを自分の手で殺し、自らも死ぬことを願っていたキャシーが、その誤りをトムに諭されて思いついたコンフィデンス・ゲームは、死んだ女性たちの力を借りて自らの生を探るものとなっている。それは、自分に連なる過去の女性たちの苦しみをも引き受ける確実な変革となり、女性が男性支配の呪縛から逃れて自らの人生を歩む歴史の起点となっている。

キャシーの詐欺戦略の基本は、レグリーの「迷信を恐れる傾向を利用する」ことである。ストーリーは、その傾向を不信心からくる弱点としてとらえ、強い信仰心に支えられたトムの確固たる態度と対比している。宗教を利用して黒人や女性を下位におくシステムを作りあげた男の価値観は、その究極を实践するレグリーには、自らが宗教をもたないために、自滅への弱点となる。キャシーのコンフィデンス・ゲームは、彼女がレグリーのその弱点を利用することを思いついた時点で、すでに勝利に向けて機能し始める。彼の恐怖はその心のうちで生みだされるものであり、キャシーは恐怖を倍加させる策略を施すにすぎないからだ。

その策略とは、屋根裏部屋を誰も近づけない幽霊基地にし、一度は脱走したと見せかけてそこに戻り、追っ手をかわして脱走の機会をつかがいながら幽霊として動きまわる、というものである。脱出にあたって「クレオール系の貴婦人」に変身すること、自由州までの運賃をレグリーからせしめることで、キャシーは自らの詐欺を基本どおりに完結させている（バーグマン 五六）。性の奴隷であるために知り得た農園主の弱みを最大限に利用して、女であり、奴隷である彼女が農園主を陥れるという二重の負荷を克服する。逃亡の道順を前もって調べたり、屋根裏に潜伏するための衣料や食糧を集めることにおいても、情婦としての立場を活用している。

レグリーの迷信恐怖症を煽るために、キャシーは死んだ女性たちと連帯する。その連帯によってレグリーの悪を制裁し、その悪に人生を潰された女性たちの無念をも晴らす。キャシーは、まず、黒人女性が殺された屋根裏で「絶望のうめき声や泣き声」がするという噂を、真実と思わせる細工を施す。屋根裏の節穴に古いビンの首を差し込み、風が吹くと、そこから「陰鬱で、悲しげな泣き声」が出るようにする。レグリーのよつな迷信深い耳には、風の音が「恐怖と絶望の叫び声」に聞こえるというのがキャシーの目論見である。「残虐な殺人や幽霊、超自然現

象などの話」を集めた本をレグリーに読ませて、彼の迷信恐怖症を募らせるといつ心理作戦さえ施す。彼女が発する「狂気」のピームも、レグリーを「支配し」、恐怖を駆りたてる役割を果たす。彼女は、「ある種の狂気によって、話ぶりや言葉に奇妙で気味の悪い不穏な様子」を示し、レグリーに影響力を発揮する。自分の目つきが彼を不安に陥れることを知りながら、キャシーは「この世のものとも思われない奇妙な目つきで」彼を見つめて、屋根裏の幽霊の存在を確信させている。

レグリーの不興を買って屋根裏でリンチされた奴隷女性が、どのような人物であったかはわからず、その名前さえも明らかにされない。だがこの無名性こそ、彼女の後ろに無数の犠牲者がいることを容易に連想させる。キャシーが屋根裏の幽霊になり、「西インド諸島の海賊たちのあいだで商売をおぼえた」というレグリーと対決することは、金儲けに徹する男性の「性の商品」にされた黒人女性の歴史を背負ってともに闘うことである。

その意味合いは、白人農園主と黒人奴隷の混血であるキャシー自身の存在じたいが、黒人女性が白人男性の性の奴隷となった歴史の証人であるために、いつそう強くなっている。そればかりか、生きた証人としてのキャシーに白人の血が多く混ざっていることで、その歴史が何世代にもわたっていることが強調される。キャシーは、奴隷たちから「盗んだ」レグリーの金を盗み返して自由州への旅費にするが、そこには、「身も心も盗まれた」奴隷の歴史を精算する意味合いが象徴的に込められている。

キャシーは、自らの人生をまっとうできなかったすべての母親たちの過去とも連帯する。彼女が連帯するのは、ストーリーが理想とする母親の要素をそなえていながら、その理想を男性支配の世の中で実現できなかった母親たちである。

ストーリーは、イライザの逃亡を助けるレイチェル・ハリディをとおして理想の母親像を描いている。彼女は、クエーカー教徒の共同体で、「相互信頼と仲間意識の雰囲気」にみちた「家庭を営み、その中心を占める母親である。」「この世の平和と人間への善意」を顔に刻みつけ、自分の子どもや共同体の人びとだけでなく、世の中のすべてに敵味方なく深い愛情を注ぐ。この姿勢は、危険な逃亡生活が続けるイライザを、「愛しい娘」として迎え入れ、「安全と休息」を与えることにも表れている。大きな台所が一家の象徴として描かれているが、そこにみられるのは徹底した母権主義で、母親が食卓の上座に座る一方で、父親は一遇を占め「髭剃り」という反家父長制的行為に勤しむ。「母さんは決してそんなことは教えなかった」と、父親は母親の価値観を息子に伝えるメッセージでもある。母親は、「なごやかに、静かに、それぞれが自分のしていることを楽しんでいる」調和の保たれた台所で、「太陽光線のような輝き」を放ち、その博愛の精神をつぎの世代に伝え、外の世界への発信する役割を果たす。彼女は「女の領域」に居るものの、そこで最大限の主体性を発揮している。

キャシーはレグリーの母親の幽霊となつて彼の前に現れるが、この幽霊には、レイチェルのような理想を果せない母親たちの怨念が込められている。キャシーもレグリーの母親も、レイチェル同様の慈愛の心をもちながら、その心をレグリーが代表する価値観によって抹殺されている。黒人奴隷のキャシーが白いシャツをかぶって白人農園主の母親の幽霊になることは、父親から息子へと継承される利益優先の価値観に、その愛の世界を侵害された黒人・白人すべての母親の無念な過去を呪つことでもある。「変わらぬ愛情と忍耐強い祈り」をもって育てながら報われることのなかったレグリーの母親と、最初から育てる権利を剥奪された奴隷の母親であるキャシーとの合体は、奴隷ビジネスによってその母性愛を蹂躪されたすべての母親の象徴である。

この合体がレグリーを破滅に追い込むことは、女の価値観による社会変革を実現することでもある。レグリーはトムがもっていたエヴァの遺髪をみて、燃やしてしまった実母の遺髪を思い出し、死んだ母からの拷問を受けることになる。「罪の生活」を洗わせようと死ぬまで努力し続けた母親の愛が、レグリーの「罪にまみれた悪魔のような心のなかでは呪いの宣告」となるのである。キャシーは、母親の霊となってその拷問を強化するのであるが、「やわらかく冷たい手」に代表される彼女の生身の肉体は、幽霊の存在を実感させ、レグリーの恐怖を募らせる効果をあげる。トムやエヴァの援助を得て、黒人・白人すべての母親の想いを背負うキャシーの幽霊は、レグリーが代表する価値観を消滅させ、奪われた母親の力を復権する。踏みにじられた愛の世界は、母親の愛の力を思い知らせることで復活されている。

キャシーの幽霊は、隷従の苦しみによって矮小化され、レグリーの虐待によって殺された彼女自身でもある（ギルバート 五三四）。彼女の性格できわだつのはその激しい情熱であるが、幽霊は、レグリーに「隷従を強いられるおぞましいくびきのもとで」発露を失った情熱の表れともいえる。その情熱が愛する対象に向けられたときには彼女は「心の優しい天使」となる。レグリーのような野卑な権力に支配されると、「ぞつとするような荒々しさと狂気」となる。「私のなかに悪魔が住んでいる」と彼女はレグリーを威嚇するが、彼女の幽霊は、「天使」から「悪魔」への道をたどった彼女の激しい情熱の化身である。荒廃したレグリーの屋敷を徘徊するのは、すらりと背の高いキャシーそのままに、背の高い幽霊である。

その一方、キャシーが幽霊になることは、自らを再生させるための儀式でもある。彼女は「ほんものの幽霊」になる前に、レグリーの「厳しさと冷酷さ」に負けて「硬化した」自分の罪をあがなっている。それは、エメリンと

屋根裏に「家庭」を築き、トム⁽⁴⁾の愛情に応えて祈りを回復する、という「優しさ」を取りもどす形で行われる。キャシーは、「農園にいれば、罌におちてしまふ」というトムの助言を得て、自分からレグリーに罌をしかけるが、幽霊になることは、悪魔に身を売りかけた彼女自身の死の儀式でもある。変身して脱出することが象徴するように、彼女はこの儀式の直後に、新しい人間となつて自由の地へ旅立っている。

キャシーは、自分を「トムには絶対になれないほど卑しい」とみなしている。トムが中産階級女性に課せられた「美德」をもつて奴隷としての困難に対処するとすれば、キャシーはたしかにそのような「美德」とは無縁である。信仰心も純粹さも失い、従順でも、家庭的でもない（ハルツネン 二二二）。トムが「典型的なヴィクトリア朝のヒロイン」（アモンズ 一七二）として描かれている一方で、キャシーは「悪魔としてのヴィクトリア朝の女性の典型」（ハルツネン 二二二）ともいえる。

「悪魔」であるレグリーが、奴隷の彼女を「女悪魔」と呼んで恐れるのは、狂人のような支配力を発揮する激しい反抗心や、かつての「主人」を殺そうとし、自分の子どもをも殺した攻撃性である。キャシーは最終的にはトムの世界に迎え入れられてその罪を許されているが、そのゲームは依然として「気の強い情熱的な女がもっとも残忍な男」を打ち負かす図式を示している。トムが示すのが、ストーリーの理性が「正しい」と考える社会改革とすれば、キャシーが示すのは、ストーリーの感情が「そうしたい」と願う改革である。ストーリーは、キャシーの詐欺を「クーデター」とも呼んでいる。

新聞連載小説から女性向け単行本小説へ

ストーは奴隷制を男の世界のビジネスが生み出したものにとらえているが、そのことを糾弾する『アンクル・トム』は、女の世界のビジネスが生み出した作品である。十九世紀のアメリカでは、多くの物語が文学市場で売れる商品となることを目指して書かれた。そこには、「中産階級の平均的知性をもつ普通の読者」が、巨大なる読書人口を形成して、大量の読物を娯楽として消費するようになったという背景がある（ハート 八六）。読物を書くことが、収入の道にもなり得るようになったのである。そのなかで女性作家による、女性のための、女性についての読物は、一大市場を形成し始めていた。巨大なる読書人口の五分の四は、家にいてより多くの余暇をもっていた女性によって占められていたためである（ハート 八六）。キャシーの人物像やそのコンフィデンス・ゲームは、明確な社会的・政治的メッセージを伝えながら、同時に、作品が女性マーケットを意識して書かれた事情を強く反映するものとなっている。

ストーは生計を支える必要に迫られて書いた職業作家であったが、このことは『アンクル・トム』の生成と深くかかわっている。生活費を得ることが目的であれば、売れる工夫が芸術性の追求に優先され、読者の需要に応える努力が何にもまして要求されるからだ。『アンクル・トム』は、まぎれもなくこのような工夫と努力の賜である。

物語は、もともと奴隷制廃止の立場をとるワシントンの週刊新聞『ナショナル・イーラ』に連載された。奴隷問題に関する記事だけでなく、詩、逸話、手紙、短編などの読物から、地元のニュース、世界の出来事、他の新聞の転載記事などまで、多彩な内容を四ページの紙面に盛込んだ新聞である（シルヴェスター 六―七）。ナサニエ

ル・ホーソーンの短編やE・D・E・N・サウスワースの連載小説なども、この新聞に掲載されている（モット 1 四五七―五八、パバシユヴィリ 六九）。多様な読物を提供した新聞の特徴は、その「紙面割り」にもっともよく表れている。「典型的」な紙面は、「自然に関する詩、その隣には『よき妻たち』のための逸話、その下には国会議員からの手紙と笑いついての短いエッセイ、この二つのあいだに奴隷制についての憲法上の問題」という具合に構成されていたという（シルヴェスター 六）。『アンクル・トム』は、このような週刊新聞の読者との密接な関係のもとに書かれた物語である。

読者の需要に応えるストーリーの努力は、まず物語の長さに表示されている。連載は、一九五一年六月五日から翌年四月一日まで、四十一回にわたった。これは当初の予定を大幅にこえる展開で、連載の延長を望む読者の声に応えた結果であった。新聞には、連載の延長を希望する読者の声が、物語と同時に掲載されたというが（スミス 七一）、「三、四人の人物をつづじて事は展開する」（ヘドリック 2 六六）という計画は、連載が進むにつれて四十人にもふくれあがった（パバシユヴィリ 六九）。読者の要望に応じて連載を続けるために、次つぎと人物が描き加えられたのである。元来は「モノであった男」という副題が、「身分の低い者たちの生活」に変更されたことにも、この辺の事情が表れている。長期連載となれば、主人公の周囲に多彩な人物を配置し、多彩なプロットを加えなければならぬからである（スミス 七三）。

トムとイライザがそれぞれ南と北へ旅を続けるという設定は、その出会いによってエピソードを重ねることができ、読者の需要によつて長さを調節する便利な方策である。主人公の動きによつて小説を継続したり中止したりするこの方式は、文学市場で売れることを目指して書かれた多くのアメリカ小説に使用されたパターンである（鵜殿

三二。ストーリーは、多彩な人物配置を作品のなかで「バレエの群舞」と呼んでいるが、その群舞の最後に登場するキャシーは、連載を延長する過程で創造された人物で、物語が短かったら登場したかどうかも疑わしい。

連載小説の読者の要求に応える努力は、作品の人物像にも表れている。ストーリーは自分の作家としての仕事を「画家のそれ」(ヘドリック・ハート 六六)にたとえている。印象深い人物を描きだすことは、連載小説の場合とはくに重要になる。とくに何十人もの人物を配した長期連載となれば、数週間ぶりに出会う人物には、きわめて鮮明なイメージを付与される必要がある。この意味では、『アンクル・トム』は、印象深い人物像の宝庫である。人物の特徴がくり返し説明され、人物がつねに対比関係のもとに描かれるなど、読者が思い出しやすい工夫も施されている(スミス 七四)。ストーリーの言葉が描きだした数多くの鮮やかな人物像は、連載小説をつなぐ大きな柱である。『イーラ』の編集者ベイリーは、エヴァの死後「ほとんどすべての読者」が物語に関心を抱くようになったと述べている(アダムズ 六〇)。キャシーはエヴァの死後登場するが、農園主を追いつめる狂気に満ちたその強烈な個性は、高まった読者の関心を持続させるための、作者の巧みな手腕を示すものである。

連載半ばで、単行本として出版する契約をしたために、ストーリーは出版社から連載を早めに切りあげるよう申し渡される(スミス 七三)。連載を続けて欲しいと言つ新聞読者と、物語が長すぎるとは単行本には不適切だと主張する出版社とのあいだで、双方の圧力を感じながら物語の終結部分を書いたことになる。キャシーは物語の結論となるべきメッセージを伝えながら強烈な印象を残し、連載小説を締めくくる数章に登場するには効果的な人物である。ストーリーにとって、キャシーのコンフィデンス・ゲームを描くことは、連載を終結する格好な策略だったのかもしれない。

キャシーのコンフィデンス・ゲームは、人里離れた「湿地帯の迷宮」のなかの廃園で、狂気・幽霊・恐怖などを軸にくり広げられ、ゴシック小説の手法が取り入れられている。カレン・ハルツネンは、牧師であったストーリーの父や兄弟の説教内容などとあわせて、社会改革の意図をもったゴシック小説として『アンクル・トム』を分析している（一〇七―三四）。だが、このゴシックの枠組みこそが、広く読者に読まれるための秘策でもある。

ゴシック物語は、センチメンタル小説などと並んで、アメリカでは十八世紀以来人気のジャンルであった（ハー・ト 六五）。新奇な恐ろしい物語が広く好まれたことは、いかに売れる作品を書くかを風刺的に指南した、エドガー・アラン・ポーの「ブラックウッド風の作品の書き方」（一八三八）などによっても明らかである。アメリカでは、消費社会の商品として生き残る方策として、ゴシックの要素をもった読物が数多く書かれたのである（鵜殿 二九）。『イーラ』の編集者が言うように、エヴァのセンチメンタルな死の場面によって多くの読者が作品に興味を示したとすれば、ストーリーは、続くキャシーのシーンでは、ゴシックの要素を盛込むことで読者の興味を持続させたといえる。

ストーリーが読者をつねに意識していたことは、キャシーの「悪女」としての性格づけにも影響している。女奴隷が白人農園主を餌にかけるコンフィデンス・ゲームは、キャシーの過激な性格があつて可能になるが、その過激さとは白人女性読者が共感をもち得る範囲内に留まっている。トムは、キリストの愛を実践して自らの勝利と社会変革をもたらすことで、同様の「美德」を課せられていた女性読者に男性支配社会で生きる指針を示したといえる。その「美德」の枠をこえたキャシーは、女性読者の同情を得るための工夫が凝らされている。

彼女が白人の血を多く引く混血であることや、白人の父親が生きているあいだは修道院学校で教育を受け、フラ

ンス語、音楽、刺繍などの「教養」を身につけているという設定も、白人女性読者の共感を呼ぶためのしかけである。見た目だけでなく、その前半の人生が白人女性読者のそれに似ていれば似ているほど、その後の人生の悲惨さが、読者に訴えるからである。父親の死でとっぜん始まるその奴隷人生の不条理さが、同情を生むと同時に、奴隷制反対の強力なメッセージとなる。自分の子どもを殺すその行為も、それが愛する子どもを奴隷制から守る唯一の方法であることで、「女性だけが許すことができる」(パバシュウィリ 七三)ものとなる。

作品中、もつとも過激に奴隷制の悪を糾弾するジョージ・ハリスは、白人と変わらぬ容貌と「主人」以上の能力をもつ身ながら、奴隷としての苦渋を強いられることで、白人読者に訴える効果を発揮する。ジョージが物語前半部で果す役割を、キャシーはその後半部で果している。

キャシーが語る身の上話においても、中産階級の価値観が明白に表れている。彼女は白人の父親に「人形のようなきれいな服を着せられ」周囲の者にその可愛らしさを誉められたことを、好ましい経験として語っている。父親の死後、彼女は二千ドルで白人男性に買われるが、その事實は、「彼を愛していた」という理由で問題にされない。その愛ゆえに、自己を無にして男性につくす「家庭の天使」になることを無上の喜びとしている。

ジョージ・ハリスは、再会した妻のイライザに向って、「男にとって自分の妻と子どもが自分のものだと思えることはなんと幸せなことか」と言つ。奴隷制によって「主人」の所有物になることを強制する人権侵害を糾弾しながら、女性を男性の所屬物とみなす中産階級の価値観を理想としていることになる。キャシーも、この点においてジョージと共通している(ジェーレン 三八八)。

『イーラ』には、十九世紀半ばに起ったヨーロッパ諸国の民主化運動のニュースが掲載されたというが(スミス

七五、ストーリーはそれらをジョージたち奴隷の自由への逃亡と結びつけて描いている。新聞で報道されたニュースの内容と物語の内容とを関連させることで、読者の共感を得る努力をしている。四ページからなる新聞には、このような政治ニュースとならんで、女性読者に向けて、「よき妻」になるための指南が掲載されていた（シルヴェスター 六）。『アンクル・トム』が、このような新聞に連載された物語であれば、ストーリーにとって、中産階級の価値観を代弁する人物を描くことは必然だったのかもしれない。ストーリーは、レイチエルが母権主義を実践する場所を「パラダイス」と呼び、ユートピアとして描いている。女性が家庭やコミュニティで中心を占める理想を掲げながら、それを「どこにもない所」として描くストーリーは、女性を男性の所有物とみなす社会の現実をみすえていたともいえる。

ゴシック小説の枠組みのなかで、キャシーの強さには「狂気」や「魔法」の色づけが付されるが、この「超自然性」も、彼女がキリスト教文化のなかで「安全」を保つ方策である（アスケランド 七八九）。「稲妻のような視線」を黒い目から発し、畑における重労働も「魔法をかけたように」「こなし」「超自然的な明晰さ」を発揮して、怪物のような風貌のレグリーを追いつめる。彼女は、悪魔退治をするスーパーウーマンになることで、「女悪魔」の汚名を返上することができる。「人生を押しつぶす苦しみによって狂気と絶望に陥った」という説明は、彼女の反抗心や攻撃性を正当化することにもなる。

『アンクル・トム』が読者の需要と密接な関係をもって書かれた物語であることは、コンフィデンス・ゲーム終了後の展開にも表れている。イライザがキャシーの生き別れた娘であるという都合のよい偶然など、読者が喜ぶハッピーエンドに向けてのさまざまな偶然が次つぎと起っている。イライザが物語前半で成し遂げる隷属からの奇跡

的脱出を、キャシーがその後半で行つたことで、二人を結びつけることは、構成上の工夫であつたともいえる。だが、この二人を親子にするという筋書きが、連載過程の性急な思ひつきであることは、血脈の描き方に矛盾があることでも明らかである。作品冒頭でイライザの息子は、四分の一黒人の血がまじつた混血「クウォッドルーン (quadroon)」とされているが、その祖母であるキャシーもまたクウォッドルーンとして描かれている。

『アンクル・トム』は、連載が終了するほぼ一週間前に二巻本となつて出版された。単行本として出版される際に、句読点や方言の表記法から、各章のタイトルなどに至るまで、さまざまな改訂が行われた。その詳細はブルース・カークハムの研究で明らかである。このような改訂のなかで、もっとも注目すべき点は、新聞版の最後を飾つた作者自身の子どもたちへの言葉が、単行本ではカットされたことである。人種差別をしないで、エヴァのような心をもつて欲しい、と子どもたちに訴えた四パラグラフが、すべてカットされている(カークハム 一八三)。

物語には子どもが数多く登場することから、ストーリーは当初、子どもの読者をも強く意識していたと考えられる。『イライザ』の編集者ベイリーに『アンクル・トム』を売り込む目的で書いた手紙でも、ストーリーは、国家の重大事にあたつて女性同様、子どもも意見を言うべきときがきた、と述べている(ヘドリック 2 六六)。このような経緯からして、ストーリーが子どもの読者を考慮に入れていたとみなす方が自然である。イデオロギーを伝えることでは、未来を担つた子どもを対象にすることは、きわめて効果的でもある。

だが、本の形に出版するにあつて、ストーリーは女性読者向け小説としての特徴をより明確にすることで、売れる商品としての体裁を整えたと思われる。空前のベストセラーになる物語も、紆余曲折があつて出版の運びとなつたことを考えれば、事前の改訂は当然といえる。出版を断つた出版社もあるばかりか、引き受けたボストンの出版社

も、社長の妻の説得で応じたという。「女性による、流行らないテーマについての小説は危険が大きすぎる」というのが、出版を断った出版社と引き受けた出版社の共通した意見だったという（ヘドリック・ハヴィー 二三三、パバシユヴィリ 六九）。一巻本となって出版された『アンクル・トム』が巻き起した「熱狂」は、『イーラ』の読者のあいだで起ったそれとは比較にならないほど大きいものだったが（モット 1 一四二）、その陰で売るための努力が最後までなされた事実も見逃せない。

読者が最後に目にするキャシーは、再会を果たした娘イライザの影響を受けてキリスト教徒になり、小さな孫娘を抱く「若きおばあさん」としての姿である。読者の喜ぶハッピーエンドの演出としても、激しさを失ったキャシーの変貌ぶりには拍子抜けの感がある。男性に支配される怒りを自由へのエネルギーに転化させたキャシーの魅力は、愛の美名のもとに家父長制に取り込まれたままになるのではないか、という疑問も起る。

だが、奴隷制の呪縛をコンフィデンス・ゲームによって能動的に切り抜けたキャシーは、男性からの経済的自立に向けての強さも示している。レグリーに虐待され、畑仕事を強いられても、したたかに働き抜いた超人的な強さがその証である。時代の変化を予感させる女性の確実な強さは、彼女だけでなく、農園経営に力を発揮するエミリーや、料理の腕をプロとして活用し夫を買い戻す費用を貯めるトムの妻などにも共通するものである。してみれば、キャシーが孫娘を抱く姿は、奪われた子育ての喜びを取りもどそうとする後ろ向きのものでなく、女性の権利が奪われることのない未来へ向けられていると解釈すべきかもしれない。彼女の表情は、かつての「絶望しやつれた」ものから、「優しい確信に満ちたもの」に変化している。

注

- (1) ストーは、「ストーリー夫人」という呼び名で有名であるが、この事実こそが当時のアメリカで強調されたジェンダーのヒエラルキーを示す。ヴァージニアの女性について研究したある歴史家は、一八五〇年代に起った「象徴的な変化」を発見している（エヴァンズ 一〇一）。新聞に既婚女性のことを記載するとき、女性自身の名前を使わず、夫の名前に「夫人」をつけるようになったという変化である（二〇一）。
- (2) 引用部分の日本語訳は、『アンクル・トムの小屋』については、小林憲一監訳を参照。その他については拙訳。
- (3) 「よき母」に育てられながら、セント・クレアが完全なる奴隷廃止論者にならなかった理由として、ストーは、彼が十三歳で母親と別れたことをあげている。彼自身、「もし私が母の庇護のもとで成長し続けていたら……聖人、社会改良家、殉教者になっていたかもしれない」と述べている。ストーが理想とする母親の力をもちながら、子どもに社会変革の芽を育てられない例は、レグリーの母親の場合にも当てはまる。ストーは、レグリーが慈悲深い母親の子として生まれながら、冷酷な人間になった理由の一つとして、彼が人生の早い時期に母親と別れたことを示唆している。
- (4) 奴隷女性が「主人」の迫害を逃れ、屋根裏のようなどころに一定期間 隠れ住むということは、ハリエット・A・ジェイコブズの自伝にその例をみるように、珍しいことではなかったようである。ジェイコブズから「文学上の忠告と援助」を求める旨の手紙を受けとったストーが、彼女の奴隷としての経験を自分の書いたキャシーの物語を裏つける事実として利用しようとしたことは、よく知られている（ヘドリック 一 二四八―四九）。

引用文献

- Adams, John R. *Harriet Beecher Stowe*. 1963. Boston: Twayne, 1989.
- Ammons, Elizabeth. "Heroines in Uncle Tom's Cabin." *American Literature* 49 (1977): 161-79.

- Askeland, Lori. "Remodeling the Model Home in *Uncle Tom's Cabin* and *Beloved*." *American Literature* 64 (1992): 785-805.
- Baldwin, James. "Everybody's Protest Novel." *Uncle Tom's Cabin* 495-501.
- Bergmann, Johannes Dietrich. "The Original Confidence Man." *American Quarterly* 21 (1969): 56-77.
- Cott, Nancy F. *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*. New Haven: Yale UP, 1977.
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Free P, 1997.
- Furnas, J. C. *Goodbye to Uncle Tom*. New York: William Sloane Associates, 1956.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Haltunen, Karen. "Gothic Imagination and Social Reform: The Haunted Houses of Lyman Beecher, Henry Ward Beecher, and Harriet Beecher Stowe." *New Essays on Uncle Tom's Cabin*. Ed. Eric J. New York: Oxford UP, 1986. 107-34.
- Hart, James D. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. Berkeley: U of California P, 1950.
- Hedrick, Joan D. <1> *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.
- , ed. <2> *The Oxford Harriet Beecher Stowe Reader*. New York: Oxford UP, 1999.
- Jehlen, Myra. "The Family Militant: Domesticity versus Slavery in *Uncle Tom's Cabin*." *Criticism* 31 (1989): 383-400.
- Kelly, Mary. *Private Woman, Public Stage: Literary Domesticity in Nineteenth-Century America*. New York: Oxford UP, 1984.
- Kirkham, E. Bruce. *The Building of Uncle Tom's Cabin*. Knoxville: U of Tennessee P, 1977.
- 小林富久子「母性の再定義—『アンクル・トムの小屋』とリベリカル・フェミニズム」『アメリカ文学』五号 四一—四八頁
- 小林憲一「『アンクル・トムの小屋』の再評価と位置付け」『アンクル・トムの小屋』五四〇—九四頁
- Melder, Keith E. *Beginnings of Sisterhood: The American Woman's Rights Movement 1800-1850*. New York: Schocken, 1977.
- Mores, Ellen. *Literary Women*. Garden City, NY: Anchor, 1977.

- Mott, Frank Luther. <1> *A History of American Magazines: 1871-1890*. New York: Appleton, 1930.
- . <2> *A History of American Magazines: 1850-1865*. Vol. 2. Cambridge: Harvard UP, 1938.
- Papashvily, Helen Waite. *All the Happy Endings: A Study of the Domestic Novel in America, the Women Who Wrote It, the Women Who Read It, in the Nineteenth Century*. New York: Harper, 1956.
- Sand, George. "Review of *Uncle Tom's Cabin*." *Uncle Tom's Cabin* 459-63.
- Smith, Susan Belasco. "Serialization and the Nature of *Uncle Tom's Cabin*." *Periodical Literature in Nineteenth-Century America*. Ed. Kenneth M. Price and Susan Belasco Smith. Charlottesville: U of Virginia P, 1995. 69-89.
- Stowe, Harriet Beecher. "An Appeal to Women of the Free States of America, on the Present Crisis in Our Country." Hedrick 452-56.
- . *A Key to Uncle Tom's Cabin: Facts and Documents upon Which the Story is Founded*. 1953. Bedford, Mass: Applewood, 1998.
- . *Uncle Tom's Cabin*. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. New York: Norton, 1994. 『アンクル・トムの小屋』小林憲一監訳 明石書店 一九九八年
- Sylvester, Melvin. "Negro Periodicals in the United States." 11 September, 2003. <http://www.liu.edu/cwis/library/historic.htm>
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985.
- 鶴殿えりか 「消費されるヒーロー——十九世紀アメリカ小説と大衆文化」『アメリカ文学のヒーロー』越川芳明編 成美堂 一九九一年 二三—二三 頁
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1800-1860." *American Quarterly* 18 (1966): 151-74.

